

今年で開館20周年をむかえます。

クリストファー・ドレッサー
色絵椿文龍花瓶 (一対) 1886年
陶器、(高さ)36.5cm
製作：オールドホール・アーザンウェア・カンパニー



胴に椿の彩色が施され、首には金彩が施された一対の花瓶です。最も目を引くのは、胴体にぐるぐると巻き付いている龍の装飾でしょう。一見すると東洋の陶磁器のように見えますが、これが制作されたのはイギリスでした。

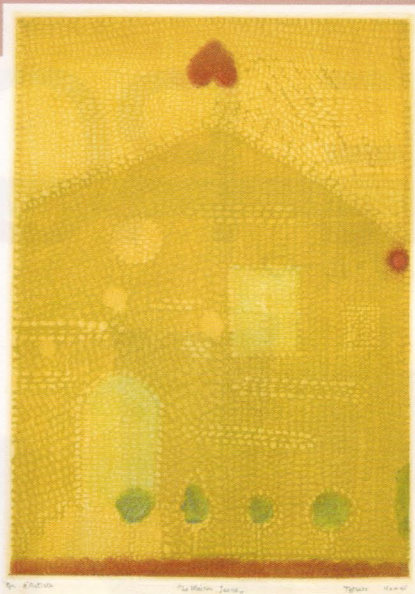
これをデザインしたクリストファー・ドレッサー(一八三四〜一九〇四)は、一九世紀末にイギリスで活躍した装飾美術家です。彼は、金属器、陶磁器、ガラス、テキスタイルなど、日常生活の製品を数多く制作し、いわば今日の工業デザイナーのような活動をしていました。では、どうしてこうした東洋風のデザインが生まれたのでしょうか？

実は、ドレッサーは明治九年に來日しており、日本各地を視察しながら日本の工芸品を調査したことが知られています。膨大な数の日本製品を購入してイギリスへ持ち帰ったドレッサーは、それをもとに日本の陶

磁器の文様や釉薬の研究に没頭し、東洋風のデザインを持つ製品を作りあげました。この陶器でも、高く盛り上げられた龍の浮彫の文様には、明治初期に横浜で輸出用陶磁器の窯を開いた「眞葛焼」で知られる陶工、宮川香山の影響が強く表れています。ドレッサーのこうした活動は、日本の製品やデザインをイギリスに紹介する重要な役割を果たし、その後ヨーロッパ各地に広がる「ジャポニスム」運動の先駆的な役割を果たしたといえるでしょう。

(佐藤 秀彦)





La Maison Jaune
(黄色い家)
1960年
ディープ・エッチ、アクアチント

駒井哲郎

1920-1976

Tetsuro Komai Retrospective

昭和9年、駒井家に一冊の雑誌が送られてきました。それは、版画家で画商も営んでいた西田武雄が版画の普及と啓蒙のために創刊した月刊誌『エッチング』でした。当時、紳士録に掲載されていた駒井の父親に宛てて送られてきたのです。この『エッチング』によって、14歳の哲郎少年は初めて銅版画の世界を知ることになりました。翌年、駒井は西田武雄が主宰する日本エッチング研究所に通う中で、ホイットスラー、ルドン、レンブラントなどのオリジナル銅版画に初めて接します。ひとりの少年が、銅版画家としての宿命を背負った瞬間でした。

「・・・少年の時、あの初めて銅版画を見た時の戦慄にも似た深い感動と、心のうちに準備されていて銅版画を受け入れて自分のメチエにした」と云う願望をもたらし幼い時から無意識に蓄積されて来た心情とにそむくわけにはいかなさうな思っようになった。「白と黒の造形」小沢書店、1977年。駒井が50歳の時に執筆したエッセイには、当時の彼自身の心境が綴られています。駒井哲郎は56歳で亡くなるまで、銅版画一筋でした。銅版画の表現を

通じて、眼にみえる現実と眼にみえない心の内を追い求めた才能あふれる芸術家でした。銅版画の表現を切り開き、後進を育て、銅版画という芸術ジャンルを確立した駒井は、戦後日本の銅版画の先駆者として、今もなお高い評価を受けています。夢と現実が織りなす駒井の作品は、私たちをいつでも想像豊かな世界へ誘ってくれるのです。

本展覧会では、駒井哲郎の軌跡の全貌を資生堂名誉会長の福原義春氏が蒐集した約500点の一大コレクションによって紹介いたします(期間中、全作品総入れ替えの2部構成をご覧ください)。慶応中学時代の貴重な初期作品から、国際展で受賞し世界的に高い評価を獲得した1950年代、色彩豊かなカラー作品やモノタイプに取り組み、さらにブックワークに新たな地平を切り開いた1960年代以降から晩年に至るまで、本展覧会は銅版画に生涯を捧げた駒井哲郎の回顧展となります。

夢と現実が織りなす版の迷宮・駒井ワールドへ、さあ、みなさんで出発しましょう。

(杉原 聡)

駒井哲郎

1920-1976

Tetsuro Komai Retrospective

第I部 2012年1月5日(木)~1月22日(日)

第II部 2012年1月25日(水)~2月12日(日)

開館時間/午前9時30分から午後5時(入館は午後4時30分まで)
休館日/毎週月曜日(1月9日開館、翌10日休館)

1月24日(火)は展示替えのためご覧いただけません。

観覧料/一般500(400)円 高大300(240)円

()内は20名以上の団体料金

中学生以下、65歳以上、障がい者手帳をお持ちの方は無料

主催/郡山市立美術館 協賛/SHI/EIDO



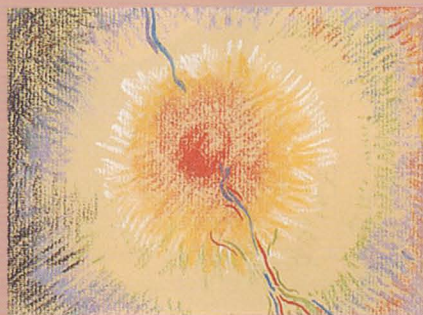
船着場のある風景 1935年
エッチング



東の間の幻影 1951年
サンドペーパーによるエッチング

湯浅譲二と駒井哲郎

～オートスライド「レスピューグ」をめぐる～



レスピューグ スライド原画

2007年の春、作曲家・湯浅譲二氏のアトリエを訪ねる機会に恵まれました。この年、当館の開館15周年を記念して「湯浅譲二によるYuasa Joji展」が企画開催され、その準備のために湯浅氏のアトリエに伺ったのです。リビングから二階へと続く階段の壁には、銅版画家・駒井哲郎の若き日の作品が大切に飾られていました。

湯浅譲二氏（1929年生まれ）は、国際的に第一線で活躍する郡山市出身の作曲家です。1952（昭和27）年、湯浅氏は若き前衛芸術家グループ「実験工房」に参加し、同じ年にメンバーに加わった銅版画家で慶応義塾大学の先輩でもあった駒井哲郎との交流が始まりました。諸芸術のジャンルを超えて活動を行った「実験工房」は、詩人で評論家の瀧口修造を指導的役割として1951（昭和26）年に結成され、美術家の北代省三、山口勝弘、福島秀子、佐藤慶次郎、写真家の大辻清司、音楽評論家の秋山邦晴、作曲家の武満徹、鈴木博義、ピアニストの園田高弘らが名を連ねていました。そうした中、1953（昭和28）年9月に開催された実験工房第5回発表会において、駒井哲郎と湯浅氏が共同制作した「レスピューグ」が上映されます。それは、スライドとテープが連動して動く新しい機器オートスライド^{※1}を使用し、映像と音楽のインターメディア的な作品でした。駒井が構成を、湯浅氏が音楽を担当した「レスピューグ」の他に、第5回発表会では、「見しらぬ世界の話」（北代省三・構成／武満徹・脚色／湯浅譲二、鈴木博義・音楽）、「水泡は創られる」（福島秀子・構成／福島和夫・音楽）、「試験飛行家W.S 氏の眼の冒険」（山口勝弘・構成／鈴木博義・音楽）のオートスライドによる3作品が上映発表されています。

「レスピューグ (Lespugue)」とは、フランスの詩人ロベール・ガンゾ（1898-1995）による詩の題名であり、南仏ガロンヌ県の地名です。詩の中では、この地から出土した先史時代の像「レスピューグのヴィーナス」をモチーフに、古代への情熱が官能的に謳われています。

30枚ほどあったとされるスライド原画は、それぞれ約16×12 cmの大きさの紙に不透明水彩絵具とパステルによって抽象的なモチーフが描かれています。スライドとして想定された順番や画面の天地は不明ですが、ガンゾの詩から想を得た一連のイメージが有機的に次々と展開してゆく映像を思い描かせます。快い即興性を感じさせる鮮やかな色づかいには、駒井の銅版画作品につながる豊かな色彩世界が拓かれています。一方湯浅氏は、テープを逆回転することを想定しながらピアノ曲の終わりから始めに向かって譜面を書き、フルート演奏を加えて逆回転に再生させるといった実験的な手法で臨みました。時間と逆行している音など誰も聴いたことのなかった時代に、ミュージック・コンクレートという^{※2}新たな音響世界への扉を開いたのです。

「何日間もの連続徹夜での制作の末に開かれたコンサートの日に、会場の第一生命ホールで私はヘルツ・ノイローゼで倒れ、友人が薬局に走ってくれたりするあわただしさの中に、駒井さんはアルコールを大部入れて現れた。」（『プリントアート』17号、1974年）後に湯浅氏は、親しみを込めてこう回想しています。残念ながら、上映されたオートスライド作品についてはスライドも音楽テープも残されていません。ふたりが手がけた「レスピューグ」はどのような作品だったのでしょうか。駒井が描いたスライドのための原画と、湯浅氏が作曲したミュージック・コンクレートのための原譜が、発表当時の内容を今に伝える貴重な手がかりとなっています。

「実験工房」は結成されてから60年近くの年月を経ましたが、解散されたわけではありません。銅版画家・駒井哲郎と作曲家・湯浅譲二。共に既存概念や権威に囚われず、芸術上それぞれの個性を際立たせながら、ふたりの芸術家は時を超えて実験精神と信頼を分かち合っているのです。

（永山多貴子）



レスピューグ スライド原画

※註1 オートマチック・スライド・プロジェクター
株式会社ソニーの前身東京通信工業が教材として開発した。
※註2 テープに録音された具体音を素材に、逆回転や変速など機械的に加工・変形してつくられた音楽。

風土記の丘の美術展、 10年目の夏

本名 恵子

(郡山市小学校造形教育研究会会長・小泉小学校校長)



《展示風景》第1回↑ 第2回→



《展示風景》第3回～第9回

「23年度は、風土記の丘の美術展が10周年を迎えます。子どもたちと先生方で何か記念作品を考えませんか?」「各学校ごとに小さなパーツをお願いして、大きな一つの作品にしたら?」「イベントなども企画できると楽しいですね!」23年2月初旬に開催した小学校造形教育研究会役員会「風土記の丘の美術展10周年記念イベント」の話し合いは、大いに盛り上がった。

しかし・・・3月11日午後、東日本大震災が発生し、東京電力福島第一原子力発電所の事故により、私たちが楽しみにしていた企画は、諦めざるを得ない状況となった。地震による建物被害に加え、放射線による影響も深刻であった。安全確保のため、子どもたちの屋外活動は制限され、中止となった屋外での行事もたくさんあった。

東日本大震災後、郡山市立美術館は休館。「風土記の丘の美術展」の開催が出来ないかもしれない。不安は大きくなるばかり・・・。記念行事は出来なくても、こんな時だからこそ、子どもたちの思いを十分に表現させたい!!子どもたちの笑顔が輝き、心が癒される「風土記の丘の美術展」を是非開催したい!!そんな願いを受け入れて下さった郡山市立美術館の館長様・学芸員の皆様・スタッフの皆様の再オープンに向けてのご苦勞は、大変であったろうと思う。休館中も、復旧に向けての作業や再オープンの後の準備に加え、避難所の応援、学校への出張授業など様々な業務に携わっておられた。私たちのわがままいっぱいの願いを「大丈夫です!!郡山に避難してきている区域外就学の皆さんの作品も一緒に飾りましょう。」笑顔で新たな提案をし



《展示風景》第10回

風土記の丘の美術展

郡山市内の小学生が図工の授業で取り組んだ作品を夏休み期間中、郡山市立美術館に展示する展覧会です。

「生きる力・美の力」展

宮武 弘 (福島県立美術館学芸員)



福島県立美術館外観

このたびの震災では、県内の美術館も多くの被害を受けました。福島の県立美術館でも、幸い負傷者こそ出ませんでした。施設の損壊により臨時休館を余儀なくされたほか、当初の予算が執行できなくなっただけに、予定していた展覧会を中止しなければなりません。他館においても概ね事情は同じだったといえます。

しかし、このような状況だからこそ、震災に負けない姿勢を内外に示し、復興に向けて立ち上がる福島県民の力になる事業が必要なのではないか。そんな思いから生まれたのが、9月10日～10月16日まで県立美術館で開催された「がんばろう福島 生きる力・美の力展」でした。郡山市立美術館をはじめ、いわき市立美術館、喜多方市美術館、CCGA現代グラフィックアートセンター、諸橋近代美術館、そして県立美術館を含む計6館が、所蔵するコレクションを持ち寄ってひとつの展覧会をつくるという、初めての試みです。展覧会開催が決まったのがオープンのわずか3か月前という、平素ではとても考えられないようなスケジュールで、各館スタッフの皆様に

は大変なご迷惑をおかけすることになってしまいました。結果的にそれぞれの美術館を代表するような約100点の名品、優品をお借りできたのは嬉しい誤算でした。

展示構成として心がけたのは、各美術館のコレクションの特色をわかりやすく紹介すること。郡山市立美術館からはイギリス美術と郡山ゆかりの美術という二つの系統からのご出品をお願いし、前者からはゲインズボロらの肖像画やターナーの版画など、そして後者では鎌田正蔵の洋画、安藤重春の日本画など、計20点



による構成となりました。会期中には各美術館の学芸員をお招きしてのギャラリートークも開催。郡山市立美術館の回では中山恵理学芸員に講師を務めていただき好評を得ました。

32日間の入場者数は2600名あまり。お客様からの反響は数字以上に大きく、そして温かいものでした。会期中のアンケートから、幾つかご紹介しましょう。

「福島にもすばらしい作品があるという事にあらためて感動しました」(50代女性/伊達市)

「ぜひ県外の方々にも見てもらい

たい展覧会です」(40代女性/いわき市)

「被害の大きかった地域への移動展覧会などは可能なのでしょうか？交通手段のない困っている人が見る機会があればと思います」(30代男性/相馬市)

3・11からはや10か月。震災被害と原発事故によって、福島県は現在もなお厳しい状況にあります。今回の展覧会がわずかなりとも、心に安らぎをもたらす復興に向けた活力を育む機会となったなら、望外の喜びです。



上：郡山市立美術館学芸員によるギャラリートークの様子
下：郡山市立美術館所蔵品の展示風景



©「手塚治虫のブッダ」制作委員会

©手塚プロダクション

鉄腕アトム連載60周年 映画ブッダ製作記念

手塚治虫展

2012年(平成24年)4月14日(土)~6月3日(日)

休館日/毎週月曜日

主催/手塚治虫展実行委員会

郡山市立美術館 福島民友新聞社 福島中央テレビ

後援/読売新聞社東京本社 ふくしまFM

企画制作/手塚プロダクション

制作協力/東映株式会社

観覧料/未定

※2月中旬前売開始予定。

手塚治虫(1928-1989)は日本を代表するマンガ家、アニメーターとして世界中に知れ渡っています。戦後のマンガ文化は、彼をひとつの指標として展開してきていることに疑いはありません。

24歳で上京するまで、手塚は兵庫県宝塚市で過ごしました。彼はそこで、昆虫採集を楽しみ、十代で既に克明でしかも繊細な昆虫の写生帖を作っています。その驚くべき観察眼は、専門的に絵を学ばなかった彼にとっての終生の財産といってよく、彼のすべてのマンガ作品に共通する、破綻のない絵作りに直結しています。また、少年時代は宝塚歌劇や映画を観たりする一方で、戦争体験もしています。その中で培われた科学的な眼と生命への尊厳の思いとは、『火の鳥』や『ブッダ』へと結実しました。また、後期の傑作『ブラック・ジャック』は、医学博士号を取得していた彼でなければ描けなかったものです。

マンガ家として、彼は「ストーリーマンガ」と呼ばれる新たなマンガ表現の確立に努め、アニメーターとしては、国産初の30分テレビアニメシリーズの放送を成功させました。

手塚治虫は、作品に読者や視聴者へのメッセージを込めています。彼の魅力的なキャラクターたちによって繰り広げられる「手塚ワールド」は、手塚治虫が今世紀の私たちに残してくれた文化遺産です。「人間とは何か」「生命とは何か」など、今も作品を通してメッセージを発し続けている手塚治虫の世界をお楽しみください。

美術館のなつやすみ

今年は大変な年でしたね...
おや、何やら黒と白の
不思議かわいい生き物が。

黒:「は、今年の夏もあつかったね」

白:「あつかったわね」

黒:「でも、美術館はずし良かったよね。」

白:「いつも22℃だからね。」

黒:「今の時期は逆にあつたかいしね。」

白:「あつたかくてねむねむだ
おやすみ。」

黒:「え、まだ勤務時間中よお」

白:「でもさあ、勤務していても、
花形の写真撮影会はベネロべっかりだしさ。」

黒:「あらまあ、展覧会のテープカットに登場したし、
テレビにも出たし、

白:「がんばったほうよお」

黒:「そういえばさあ、
なつやすみの美術館って

白:「かなりにぎやかだったよね」

黒:「たったわね。」

白:「小学生の作った美術作品が
きれいに飾られていたわね。」

黒:「毎週学校が変わって、楽しかったわ」

白:「ほくの作品もこっそり飾ればよかったな。」

黒:「夏まつりもあってたよね? 図工や美術は苦手だけど、
お祭りなら参加してみたいよね」

白:「えっ、よかったわね。あたしなんか、みんなでおいしそう
な食べ物作ってるの見ちゃったわ。つまみ食いしていっ
たら、ほんものそっくりだけ食べられなかったのよー」



リサとガスパール&ベネロべ展オープン



撮影会 ベネロべがやってくる!



「今、美術の力で ～被災地美術館所蔵作品から～」

8月2日(火)～8月21日(日)
場 所：東京藝術大学大学美術館



東日本大震災の被災地にある美術館の所蔵作品を展示する展覧会。当館からも佐藤静司「合掌」などが出品されました。

講演会 「絵本の楽しみ、ことばの楽しみ」

7月23日(土)
講 師：石津ちひろ氏
場 所：多目的スタジオ
参加者：83人



「リサとガスパール」シリーズの翻訳や詩人作家として知られる石津先生から、本の朗読などを交えながら楽しいお話をうかがいました。

「リサとガスパール&ペネロペ展」

7月16日(土)～8月28日(日)
場 所：企画展示室
入場者：17,096人

「ペネロペがやってくる！」

7月16日(土)・8月13日(土)
場 所：エントランスホール
参加者：各回親子30組

「第10回 風土記の丘の美術展」

7月18日(月・祝)～8月21日(日)
主 催：郡山市立美術館、
郡山市小学校造形教育研究会
場 所：展示ロビー

「図工&美術の時間へようこそパートVI 「つくろう！あそぼう！夏まつり☆」

8月6日(土)
講 師：郡山市内の小中学校の先生
場 所：多目的スタジオ
参加者：162人

「ふくらませよう！ドリームばるーん」

8月12日(金)
講 師：安田 悟氏、
岡田 智氏(共立女子大学家政学部児童学科)
場 所：多目的スタジオ
参加者：53人

「デイリリーアートサーカス」

8月23日(火)
講 師：開発好明氏ほか
場 所：多目的スタジオ、ロビー
参加者：182人

講演会「バラとルドゥーテ」

10月1日(土)
講 師：御巫由紀氏(千葉県立中央博物館)
場 所：多目的スタジオ
参加者：90人

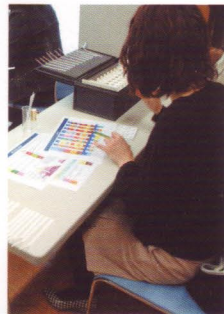


「花の画家ルドゥーテ『美花選』展」にあわせて、園芸史上ルドゥーテの果たした役割をバラの育種の観点からお話しいただきました。

「オリジナル香水づくり」

10月8日(土)
講 師：佐藤孝氏
(ポーラ化成工業株式会社横浜研究所)
場 所：講義室
参加者：20人

「ルドゥーテ『美花選』展」に合わせて、香水の基礎知識を学び、各自で調香したオリジナルの香水を制作。



ふくらませよう！ドリームばるーん



デイリリーアートサーカス



風土記の丘の美術展



つくろう！あそぼう！夏まつり☆

グッジョブ!



黒：「べつの日には、カラフルでおっきな風船の中にみんなが入って遊んでるの見たよ！ぼくが行くと壊しそうだから遠慮したけど・・・」

白：「1日だけサーカスが来てたわね」

黒：「えっ 象とかピエロとか、空中ブランコとか？」

白：「ちやいまんがな。アートサーカスですよん。アート作品をぎょうさん積んだトラックが来ましたやろ。ふわふわの人形とか、ロビーまで占拠しましたやんか。みんなカラーブロックで彫刻作ったりしてましたで。」

黒：「あ、そうだったっけ。テレビ出演で燃え尽きて寝たのかな？」

白：「・・・。でもさあ、やっぱり子供たちの笑顔っていいわよね(うっとり)」

黒：「いいよね。のびのびとものづくりを楽しんだり、ゆっくり絵を見たり・・・そうやーその調子やー子供たち！美術館を、人生を楽しむんや！親御さんもグッジョブやで！みんなの笑顔のためやったら、わてら命はりますよってに・・・ZZZ・・・(燃え尽きる)」

白：「ふふ、おやすみ。私たちの展覧会も、たくさん人が来てくれたしね。これからも、美術館をよろしく！」

イベント

ミュージアムシアター
「駒井哲郎1920-1976」展関連企画
実験工房関連の映画特集
(松本俊夫監督・湯浅譲二音楽)

「母たち」(1967年 36分)

「薔薇の葬列」(1969年 107分)

日 時：2月11日(土・祝) 午後2時から

場 所：多目的スタジオ

「駒井哲郎1920-1976」展関連企画として、
駒井と共に実験工房のひとりである湯浅譲二
(郡山市出身)が音楽監督をした名作2本を上映
します。

常設展示のご案内

■1月29日(日)まで

展示室1 ターナーとコンスタブル

展示室2 亀井至一・竹二郎の風景描写

展示室3 土橋醇とアンフォルメル

展示室4 楽しい木版画／
ガラスの美



アルバート・ジョセフ・ムーア
《黄色いマーガレット》

■2月1日(水)から

展示室1 人物を描く

展示室2 安井曾太郎と近代美術

展示室3 四季の風景

展示室4 銅版画の魅力／
クリストファー・ドレッサーと

日本美術



安井曾太郎
《公園風景》

T O P I C S

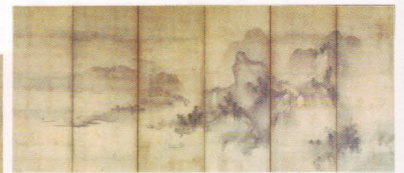
全館休館のお知らせ

2月16日(木)～2月24日(金)

館内消毒のため、全館休館となります。

○カフェ「フローラ」休業

震災の影響により、現在カフェは営業しておりません。休憩場所として利用いただけます。ご不便をおかけいたしますが、ご了承ください。



雪村周継
「四季山水図屏風」特別展示

晩年を西田町で過ごしたとされる室町時代の画僧・雪村周継(1500年頃～1580年代前半)。希少な屏風の優品を特別展示します。

3月6日(火)～3月31日(土)

場所：企画展示室1

常設展のチケットでご覧いただけます。

一般200(150)円 高・大生100(70)円

()内は団体料金 中学生以下、65歳以上、障がい者手帳をお持ちの方は無料